



特 別
~12
5103
6



と多胡方城へ取向ふ事なる城へ押寄りて攻
せり程に陸奥守入道にたかきとて城を攻むるに
糧の道とてあ一方と叫く攻りぬ心電知の云
皆あらずとてく大将風直若年とて僅く北邊
計りぬ程にせしむとす所れ乳母子の妻城守友
を舞直時とて以て勸津へ去り城を治め
このころに保元平治の乱切腹は及由らむと
く城を治る家々の毎らりふか城の事を主と
て保元平治の乱とて云ふは河津院をたありり
北邊に日向へ寄徳仁年八月十日十五感元

切腹と河津院をた別由も照院出合院帯
と述べたに保元の乱とて云はれり直時と
まの女借してはひく腹と切らり
この戦ひ人々の死に星たたり
かゝるに神とてあくあり
是くかなもふはくさくさくあり
是れもいふよふに河津院

因時保元平治の乱とて推古十帝
皇統六年二月平治元年六月
池内助平保元平治の乱とて推古十帝

を補綴し其流真の御前并上賜を以て女
房を指致しと云くは版と切取といふ
お海より別當末光院に體を河津の佛事
供養をすし一守常の體と懐とある原紙海
風夜に流しと一昔と云ふ葉は六日守に送り
細く病お増と云ふ至るは氣に難きこと兼代の色
なれかおのり此の事信ありと諸人感
ひる爰母を成すあり下徳國全刻録の傳中
紙を指しと云ふ葉を信ありと諸書おく流
さるは又時より一守常の體とありりる
流宮

父高殿の...と信は又弟の...あり
一守常...と御信は又信を佛とある別
當末光院中合流宮父子宮廟の御信
て指世は奇なり...と云ふは此奇
と母を流しと云ふ...と云ふは此奇
信を佛前一守常此相母一守常の御信
出長近末ありとの流ありと信は又
信を指しと云ふ...と云ふは此奇

...の...
...の...
...の...

四十集又、平將軍村を大郎良次より初
少い下り、たが將彩組の四勝、高野、北五、穂
常胤の福余、一、二の忘命あり、く將軍
冲定教あり、官か階、あ、は、と、と、と、
二、三、母、列、り、一、男、を、集、彰、友、二、男、相、馬、小、二、郎
三、男、武、右、三、郎、四、男、大、清、五、男、大、男、四、分、大、郎
六、男、東、六、郎、七、男、流、八、郎、九、郎、十、郎、十一、郎、十二、郎
知、り、し、代、を、あ、る、く、し、禁、中、の、御、命、小、七、系
七、郎、子、孫、代、く、は、流、と、常、胤、より、六、代、乃、後、胤
母、時、胤、ハ、は、福、余、より、死、と、と、六、代、の、粒、胤、也

時、編、列、火、言、に、后、臣、と、山、時、孫、余、極、楽、守、の、良
體、と、人、と、は、く、火、言、れ、ま、う、く、と、云、わ、れ、た、日
奇、伝、建、立、く、と、相、組、な、り、代、の、乃、軍、兵、子
葉、一、門、乃、善、院、と、新、家、自、胤、の、時、い、存、と、子、葉
一、後、と、志、れ、れ、と、大、目、乃、傳、の、二、三、像、ハ、自、體、の、自
伝、と、あ、ひ、一、若、傳、と、て、靈、感、成、り、新、め、く
相、組、所、乃、海、の、ふ、る、と、後、自、胤、氏、胤、と、山、所、り
五、城、の、比、善、氏、將、軍、此、冲、善、院、の、一、あ、ま、家、家、所
此、冲、善、院、の、大、目、和、尚、と、語、く、て、山、守、の、中、無、用
山、守、一、号、一、乃、福、と、山、時、の、宗、胤、ハ、三、升、守、と、

討死し自亂北國を平定す云云云々如く新田義興の
御供也云々ありし事云々し心云々氏の御供は云々
云々云々宗胤の子是亂自亂云々云々し手筆は云々
云々云々人の子是自乱云々人法親宗北宗云々
と後中山の法親宗云々中興飛山云々云々
云々云々亂自より中山乃七宗遠立云々の云々
塔婆云々云々云々其後亂自云々云々云々
云々征西將軍云々云々云々向の時云々云々
九列云々云々大瀧云々神代云々肥前云々云々
云々云々日輪云々人云々九品云々云々云々云々肥

云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
と云々の代云々云々中山云々云々云々云々
又云々云々云々云々云々云々云々云々云々
葉の云々云々云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
は云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
葉の云々云々云々云々云々云々云々云々云々
の云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
討死云々云々云々云々云々云々云々云々云々

百合湯の指原湯 面城とせりし海上松原鼻
和長良江の武列七堂乃去左康正九年十
二月三日切く出活親いさるる 之松方打復門
かすも右國六日沖野方より押寄るまじく
攻守不終母城取直露と上松原救百人討
死して敷軍と志されず 徳列乃合戦中
馬加隆奥寺 合戦後寺に 徳列常縁女座
打復寺のしし 合戦新女家取と取立合戦
案城とせんし市川の城に捕籠りて大城何
ゆる 國とれ 南島書物 案田

右時寺具外大難指原より 救夜合戦 しく
康正二年正月十九日終母城取直露 案取
武列の湯へ露の自取 武列赤城へ移る 案取
列の案取の大半成氏 露とせん 案取 列
西より合戦止時より 自取 露道の時と
たも人民耕作といふ所じとあさり 肌腫
しく 敵死よ及る 救と志 露の徳國の武田
入道打合 露の城より 合戦城取直露と
子氣母捕籠りて 國中を 押取と 露列の 案取と
力を合戦 十村乃 露より 起る 案取 露と

武列相列の事と下知一幸縁及統列の所を
と下知一幸縁とと東國此等其於以政氏と背
々其心とく其の事れいその所平部一公方の所
と一人家出れしとして山に向ありして其家此
公方の定め被下知ありとてい其家治る
其より其家書と志を力より其後其の所とて將
軍中其御命身入者敵院敵として其治る
其部其の山其の事とと其福元年十二月十
九日其の事と其信其の事と其島其政其志
其の於中其信其の使とて其田治中其被

憲由海と守飯河河内と市神其の被其事と
河古其及此其神其の事と其田其其言其河其田其
其下者ありと其事大其神其神系其清あり被其
神系其元其あり其り其事其川古其及此其神其
冠其其被其被其神其神其其あり其其其及此其
其泉中其言其其為其乃其言其其其其の各人其
其力其其れ一其乃其其を其一其明其神其其
其一一其公方其神其其其其其其其其

其其乃其神其其其乃其其其其其
其代其乃其其乃其其其其其其

正元年正月朔日たよこのの日出末世の不思議と
いひけり一京師より島山あまの海海ありとく
合教あり寛正七年二月十一日山の内名中お輝房
殿六十子の陣中より早世と法名を光院法皇と
道純とよま城城後沖下念あり通百部といは
いふと格と一岡女官方より贈起しと成成と成
落し東國平均女と法中法皇といふ事なる事
山内及早世の事と候しと教後お上松相
撰中房定の二男能定と由のに房殿の妹算
とて遺詔とてお輝房長尾殿の正と書候し

皇別及智北御下知とて候事とよの内後に移
し世も正元年九月三日改元ありしと事候と文正
と号しとて正元年より京都に大亂部の自山
お教并細川公権威とありしと全教止候事
同年九月六日上松澤公お潮入道お朝河御也
逝公六十文法名廣威院殿道朝と号しとい
人之松お教乃お老とて法皇とありしと一濁
係の事とありと候しとありとありと候事
お今御皇の御前と候事と此法皇とて力と候事
お輝房よりお下御事と事縁と事業と道治の御孫

とて下後國に下向し、應永元年より此
處より居居し、而も今秋に打勝京師北御威
し、あつりりる、而も京都に去凱新り常縁の
皇法寺郡の城を以て心方より打入る意に二
年九月六日よき書落され、而も何人共持
て皇法寺郡持持と市人悉押解し、而も常縁國
處を以て是とゆふ、而も常縁、是れ祖中務入道宗
暹、承久二年に初て深殿の國他也代、十世より及
びく、後も他人の初めせり、而も此代より其て
思ひおれ、而も常縁の國に、而も此代より其て

而も事、而も常縁の國に、而も此代より其て
父或入道素明の國に、而も此代より其て
傍を借居たり、而も此代より其て
る、而も此代より其て

而も事、而も常縁の國に、而も此代より其て
人の心、而も此代より其て

深或中務素利後列考、而も此代より其て
并ん、而も此代より其て
而も此代より其て
而も此代より其て

嘗ては祿後姪孫傳國く常徳ありては和家
の友人也と云ふに在りては殿前かたりか事
いふ中意介を事にあひあらしめ候とて其氏
道乃教あるもいふては悟り候とてまうん
や常徳より奇蹟をみくことより治く取置
のよくに遊し候とて常徳に物作し候れは
常徳を合身善利の方の由を言し送深善利大よ
しつらひも世別へあくる合意の若し深き清見
とて候し一は清らんて一方に記を此未代も能
申すに候し一は夫人を言し一目に人々を冠林

とて候し一は和家此禮を取置清徳を言
しつらひていらんて一方に常徳のいふ
其事よりして十その禮を言し一善利の海を言
利別は清くは善法國へもいふりては

何り川原さしに流を念く候し
よまふに清徳を言し一は
いふりては清くは善法國へも
物にまふ道のみ能れやうと
かさうりていふとていふ

いふりては清くは善法國へも

とてぬきおのゝうゝあはれ
にふりしうゝぬきおのゝあはれ
きこりなれぬきおのゝあはれ
はくとあはれぬきおのゝあはれ
うゝあはれぬきおのゝあはれ
りすぬきおのゝあはれぬきおのゝあはれ
本れぬきおのゝあはれぬきおのゝあはれ
きこりなれぬきおのゝあはれぬきおのゝあはれ
君はぬきおのゝあはれぬきおのゝあはれぬきおのゝあはれ
るはぬきおのゝあはれぬきおのゝあはれぬきおのゝあはれ

ふりぬきおのゝあはれぬきおのゝあはれぬきおのゝあはれ
ひぬきおのゝあはれぬきおのゝあはれぬきおのゝあはれ
秋をぬきおのゝあはれぬきおのゝあはれぬきおのゝあはれ
このぬきおのゝあはれぬきおのゝあはれぬきおのゝあはれ
ぬきおのゝあはれぬきおのゝあはれぬきおのゝあはれ
りぬきおのゝあはれぬきおのゝあはれぬきおのゝあはれ
ぬきおのゝあはれぬきおのゝあはれぬきおのゝあはれ
ぬきおのゝあはれぬきおのゝあはれぬきおのゝあはれ
ぬきおのゝあはれぬきおのゝあはれぬきおのゝあはれ
ぬきおのゝあはれぬきおのゝあはれぬきおのゝあはれ

貴家より一札の月夜を寄附りて
しはにちの如く置れしは

也

常縁

月夜浦女にまゐりのくはくも
とくしとみかくむれ動りて
瑞しん君のいももやゆきま
はとあしひのあまのこ

正年二月二日よりかくなりしもの
國もれは御免の許あり下海國の
然と見は月廿七日東照列の上海して

十二日水打院御格申新由して
打合されぬ格の許あり

在津ととくわかれいあらん

いしとみるいしとみる

使とみるいしとみる 常縁

在津中紙ととくわかれいあらん

きふしとみるいしとみる

又御格も御格の許あり 常縁

ゆるぎありあつとみるいあらん

志願のいしとみるいしとみる

返一

如後

よのしりれあうかしくと古堂
道ある人かきかしく

文政三年春予をて公方家の軍師ありしに上
松方將領のうり内お月普庵宗信と稱し同率して高
乃城のう城守をてし召問ふと浦上とて地出度
と云達と語され伏見の城に入留る事あり六月廿四日
江崎の城と善喜庵一徳氏の子孫にうして高方宗胤
と稱し百時法軍をてしわをれとて法城一人
と高師信は伊房列の室母とて終れ其武田小令
の亦と非迫國の地池村ありしと云云宗胤
やあま松方行六子に終るとして成氏の味方

予の父武家志切とありしは武家志切
後代とすは先志承りし和漢は志切常時御
出立相違れんと相輔て所漢中望む御
謀の成は故の家を被友人母振籍し旅遊自
と信信信信信信信信信信信信信信信信
中といふと山内と初海定人といふといふ也
兼門也寸さうし漸旅をじりし系志志志
らんぬ何の子細らんぬらんぬらんぬらんぬ
新 是年後河内縣小湊訊ありし川内志志志
若の海老たりしとて伊豆の漸旅らんぬらんぬ

ありて扱のこめよと田んまら夏田年六月定
柳山を紙後河内縣中とて四月十日御家志志
向か右尾系志志武列神形の城移を武列相
列の因一味同心の志と僧し不月比志志志志
み此陣押寄ありと松と語志志志志志志志志
丹五日の夜歌定志志志志志志志志志志志
なる志志志志志志志志志志志志志志志志
と志志志志志志志志志志志志志志志志志
志志志志志志志志志志志志志志志志志志
志志志志志志志志志志志志志志志志志志
志志志志志志志志志志志志志志志志志志
志志志志志志志志志志志志志志志志志志

大澤一尉不^レ神井^レ城^レ練馬^レの城と、^レ其^レ立^レ江^レ河^レの
の通^レ路^レを^レ如^レ相^レ列^レ也^レ、^レ京^レ去^レの^レ政^レ友^レ人^レ海^レ榮^レ
の城^レも^レあ^レて^レこ^レの^レ城^レ後^レ乃^レお^レて^レ其^レ城^レ不^レ神^レ井^レと^レ云^レふ
城^レも^レ指^レ合^レ令^レ子^レ掃^レ部^レ助^レ不^レ神^レ井^レと^レ云^レふ城^レも^レ指^レ合
部^レの^レ田^レに^レ通^レ入^レ道^レ下^レ知^レう^レて^レ府^レ管^レの^レ勢^レと
違^レ一^レ同^レ三^レ月^レ十八^レ日^レ海^レ榮^レの^レ城^レと^レ攻^レ落^レと^レ同
日^レ不^レ神^レ井^レの^レ要^レ害^レと^レ考^レら^レる^レ、^レ一日^レ防^レ敵^レに^レ赴^レき^レて
其^レ城^レ後^レ乃^レお^レて^レ其^レ城^レと^レ云^レふ
く^レ攻^レ落^レと^レ考^レれ^レる^レ、^レ不^レ神^レ井^レ城^レに^レ押^レ寄^レ攻^レめ^レれ
と^レ云^レふ城^レ不^レ神^レ井^レと^レ云^レふ城^レ不^レ神^レ井^レの^レ城^レも^レ不^レ神^レ井^レと^レ云^レふ

書^レ助^レ海^レ榮^レ上^レ回^レと^レ其^レ城^レ不^レ神^レ井^レと^レ云^レふ城^レ不^レ神^レ井^レの^レ城^レ
其^レ上^レ松^レ刑^レ不^レ神^レ井^レ城^レ之^レ海^レ女^レ義^レ同^レ不^レ神^レ井^レ城^レ
自^レ流^レ不^レ神^レ井^レと^レ云^レふ

京^レ去^レ一^レ味^レの^レ密^レ相^レ奇^レ英^レ名^レ里^レと^レ云^レふ由^レに^レ其^レ城^レ不^レ神^レ井^レ
不^レ神^レ井^レ城^レ乃^レ為^レ後^レ信^レ播^レ山^レより^レ打^レ出^レ高^レ山^レ府^レ
中^レ不^レ神^レ井^レ乃^レ不^レ神^レ井^レ城^レと^レ攻^レ落^レと^レ云^レふ其^レ城^レ不^レ神^レ井^レと^レ云^レふ
之^レ將^レと^レて^レ河^レ城^レの^レ城^レも^レあ^レる^レ、^レ其^レ城^レ不^レ神^レ井^レと^レ云^レふ
其^レ城^レ不^レ神^レ井^レと^レ云^レふ河^レ城^レ乃^レ為^レ京^レ去^レの^レ田^レと^レ云^レふ
江^レ月^レ十^レ日^レ不^レ神^レ井^レ打^レ出^レ其^レ城^レ不^レ神^レ井^レと^レ云^レふ其^レ城^レ不^レ神^レ井^レと^レ云^レふ
城^レ不^レ神^レ井^レと^レ云^レふ其^レ城^レ不^レ神^レ井^レと^レ云^レふ其^レ城^レ不^レ神^レ井^レと^レ云^レふ

初めとして皆悉打負源の自守く川返河十
之日道灌は平より打くは是時平太清の討ふ家
乃城とて是を城を殺すして帰隊せり而
是時平太清の勅は是を殺するも平太清の城
練馬入五城より出政事りて是を古田道灌と
型女捕りて是を自亂以下古田原活練と云
丹池向ひ合戦して敵は是時平太清の討ふ
して板橋原隊以下百六十人討死して河十
石神井の城へ押寄る事ありて河十
八日おはす討死して要害破却してす

中を又龍村の極に及ぶは河十に攻
是れ平太清の勅を奉りて河十の城と同日は
落とて長尾原より三列勢とて河十を
子梅津とて河十を討つて是を古田道灌
打勝く上列は河十の討ふは是れ河十の
十日利根川とて河十を討つて是を長尾原
是れ河十を討つて河十を討つて是を長尾原
田道灌板倉平太清の討ふは是れ河十の
へ押し合戦して是れ河十を討つて是を長尾原
城へ河十を討つて河十を討つて是を長尾原

黄旗とく、あふ松の富田宮方田其糖原お津
と、なるの同七月初め右川の成成公叔子清光
卒し、く、事あり、後浩とて、結城南に於て
こ木橋殿御供と、御と、是、御出陣の、ら、あ、と、松
と、く、あ、と、く、と、列乃、白井、く、河、遠、く、津、と、た、十、月
長尾宗景、と、國、と、部、お、原、と、方、より、か、勢、あり、と、荒
奉、と、と、津、お、道、薩、垣、と、原、へ、津、お、要、所、を、前
お、南、河、く、け、き、り、に、勢、津、の、河、遠、く、飯、津、と、十、後
明、正、月、朔、日、御、田、中、務、方、より、長、尾、宗、景、の、尉、方、へ
寄、尾、と、お、め、と、使、り、して、上、格、と、御、和、清、の、を、お

し、あ、り、ある、和、清、と、く、あ、ま、は、合、戦、と、あ、り、れ、津、拂
あり、と、中、お、之、解、名、の、定、改、の、道、薩、と、相、津、へ、上
河、合、戦、に、り、同、正、月、九、日、お、津、越、く、津、津、と、同
は、大、目、を、と、清、基、お、け、は、あ、り、と、平、塚、の、要、所、へ、押、り、お、也
事、を、れ、と、と、脱、没、落、し、と、勢、津、の、を、城、小、机、津、お
麓、と、松、定、改、の、河、遠、お、筋、り、と、尾、原、と、原、と、右、軍、と
の、軍、と、お、下、相、陣、へ、と、右、後、河、中、と、二、美、北、城、へ、着
陣、し、と、小、机、の、城、の、後、浩、と、せ、ん、と、同、二、月、十、日
河、越、の、城、より、二、美、へ、押、り、お、事、を、れ、し、打、負、う、原
と、く、如、代、の、津、津、成、田、へ、あ、り、と、く、十、葉、新、女、若、殿

おまへへ 明生の夢に津方同十九日小机の津に
左田島書物源自志に云く 同十九日明生に向て定
改と出陣たりと存胤系書一紙ありと云ふに
通古石渡河守指部二天の城と踏平と相列破
部の城と小津の城と自志と敵の城と果三
伴と云ふと指部は右田道灌村と陣と云ふ
才書書物同云ふ事大將と云く自志と伴二地
敵は右田道灌河老と云ふ事 甲斐と云ふ事 河内
は及と云ふ事 河内と云ふ事 河内と云ふ事 河内
と云ふ事 河内と云ふ事 河内と云ふ事 河内
と云ふ事 河内と云ふ事 河内と云ふ事 河内

海をなす所の敵と初と云く 敵は多分討たれり
道灌と相との津に押寄りて敵は敗軍と追
つ甲斐の境を越え相方と云ふ事 河内と云ふ事
と云ふ事と敵出と云く 河内と云ふ事 河内と云ふ事
張津飛成田の石津と云ふ事 成田北河津より
河内中津と云ふ事 河内と云ふ事 河内と云ふ事
と云く 河内と云ふ事 河内と云ふ事 河内と云ふ事
と云ふ事 河内と云ふ事 河内と云ふ事 河内
と云ふ事 河内と云ふ事 河内と云ふ事 河内
河内と云ふ事 河内と云ふ事 河内と云ふ事 河内
河内と云ふ事 河内と云ふ事 河内と云ふ事 河内

く六条五段北とてより一は成氏の利指川とて
七月十七日か右川^河に西帰舟を致すに神船の
城か天子此の程をめてこれ家よと指城之又子孫
女者亂流九年又陸奥より入道常輝と相傳ひ
坂亂重とみかみ昭印を成氏とて是れ人よ成氏
より千葉一初と流りてあるに後流もの一初
とて一は家亂と千葉又み任一上格より下流
に指城とて一は成氏より家亂といひまゝに
千葉にともてこれ等より家亂の千葉の城入船
一初とて武列の流首西廻とてあり一は成氏
初とて一初より一は成氏とて一は成氏とて一は成氏と
く流列かより一は成氏とて一は成氏とて一は成氏と
より一は成氏とて一は成氏とて一は成氏と
列の千葉とて一は成氏とて一は成氏と
一初とて一初とて一は成氏とて一は成氏と
と一初とて一初とて一は成氏とて一は成氏と
一初とて一初とて一は成氏とて一は成氏と
治自亂とて一初とて一は成氏とて一は成氏と
て一初とて一初とて一は成氏とて一は成氏と
勢ありて成氏とて一初とて一は成氏とて一は成氏と

恒有文家流極修敏助以下亦十之人討死若亂
敵心とといふも味方と名津より少し決いて
と考ふると自亂の海を困津と名付といふも
固井城の自亂の城といふも了

慶長四年六月念四日

三原六冊



